

# 佐伯史談

第六十四号

「阿史研究」誌  
通算第八十六号

昭和四十五年五月廿五日

## 佐伯史談會

事務局 佐伯市大字福垣字龍護寺 羽柴芳

### 主張

### 三の丸旧御殿の移築

— 船頭所又の美挙と推賞する —

羽 柴 弘

多くの市民から惜しまれながら、三の丸の旧御殿は取り壊しが決定助と成つて、もう三

か月にもなろうか。ところが突然

船頭所又がこれを引き受けて移築復元するという話がすすむ、とり

あえず前号に掲げたように、佐伯市から無償松下げを受け、こ

れを船頭所河畔に移し、復元修築しようという。これはまことに喜ばしい話である。

昨日(五月十二日)移築志の住吉神社隣接の埋立地では地鎮

祭が行われ、今日は三カ丸では取り壊しの作業がはじまつてい

る。雨の多い特季であるが、解体、移築の作業が順調に進むよ

う祈るものである。

それともこの旧御殿が、旧藩時代の殿館として模範

ことに少ないものであり、鶴屋城の遺構として黒門(櫓門)と共に、絶対保存すべきことこそ主張したのが我々史談会だけであく、特に三カ丸が明治年間日佐伯尋常小

学校であったことも手伝って、佐伯市民の中から取り壊し反対の声が高く、又玄く佐伯市外に心ある人達から、

「佐伯市はなせこの歴史的な文化財をこわすのか」とか有り手さびしい批難をさ

うけていた。いまいまい思

いで置かばあきらめていたところ

にこの朗報である。我々はこれでの足らざりし主張、努力と反省し、移築、復元と

いう困難な事業に対して、側面からの縁に対処協

力しならよいかを考えて見よう。

既に二か月にものなるう

か、私はこのことゝ胎動

あることを某氏より伝えられ、そして某日船頭所区長外区議員の方々数名

### 本号麻立

主張 三の丸旧御殿の移築(羽柴弘)……一

研究 渡久氏御殿の記文に……(佐藤賢三)

〃 堅田の古城守山城(菅野善市)……三

〃 御宇三原の上録(羽柴弘)……六

〃 赤木村大産屋文書(周思之)

〃 佐伯の野球昔話(山本武蔵)……九

〃 佐伯と國水田狭歩(山本保)……二

〃 「小倉より」

〃 佐伯の港ほとんふ傷き……(あか)

〃 (表)

探訪 松平伯公と靈山寺(高橋智三)

〃 佐伯推治(表巻と巻末)……二二

〃 侍寺(西三寺)(高木嘉吉)

〃 移築集(表巻)・贊助寄付・會費領収書(入会員紹介など)

の来訪を茅屋に迎え、由緒ある建造物を破却するに忍びず、お城下船頭町全區民の賛同のもとに、住吉神社につづく広場に移すの事業とのとり組み態度を承り、これらに對する意見を求められたのであった。史談会として返額つてえないこと、しかも皆さんが口々にのべられる言葉の中に純粋に文化財の保存と、今後市民の左様に第二の文化会館として提供するという誠意を返して貰った。そして私として出来る協力を惜しまないこと、佐伯史談会として協議の上大いに声援するであらうことと申し上げたのであったが、私自身一つまみに今後との進めについて二三の進言を申し上げた。西野五長以下の方々は高木会長を訪問されて、正式に懇請するところがあったと由である。

だが史談会はまことに微力な研究団体である。このまゝに事業に對して何か出来ようか。又一部会員の独断や独走で、しかも会の名をまわってすることばかり避けたい。しかし事が細上の歴史的な文化財を守ることである。二百六十一年の藩政の歴史を物語り、尚且以永百年来に於て浮世教育の場であり、三の丸を訪れる市民はもとより外來者の心としかと捉えてはならない、賤の裏に焼きついてゐる建物である。この貴重なる建造物が、破却の一歩手前で救われたことを先ず喜びたい。

どのように復元されるであらうか。完全復元を言うは易い。然し総額四百万円の経費を要する。特に大座根の現状通りの復元となると大変である。屋根裏その他腐朽もひどいからう。この現状からどのように復元し、どのように修築と完成するかについては、我々史談会はこの際積極的の協力し、或る場合日指導的立場をとるべきであるまいか。

又完成後の住吉会館（仮称）私かとり取えず提供し（仮称）を

どのように活用するか、これは何か月か先の問題ではあるが、史談会は他団体に率先して集会場として貸したい。置の敷かれた、しかも歴史の匂いのパンパン感せられる住吉会館に、我々は心に期待しようではないか。

ともあれ先立のものば金である。我々佐伯史談会として何とかなすべきであらう。船頭町区の方からばま道具体的なその辺の中し入地はないが、既に「三の丸御殿移築趣意書」も教部届いている。いざれ近日中に評議員会を聞いて、今度より進めを協議したいと高木会長と話している。会長や私などの独走でなくて、佐伯史談会二百数十名の全会員が自由な意志を集めて、今後より進めに當りたいものである。どうかその際は全会員挙つての御援助と——と希望する次第である。

（附記）

三月十三日、高木御殿取壊し初日、屋根裏から次のような棟札一枚と「御殿箱」とかとり下さる。

奉 從五位下安房守藤原朝臣高泰之命 奉行 關太前右衛門 成美  
 上棟 三之丸居所武運長久邨家榮昌 長壽保太夫 保祐  
 萬延元庚申年九月八日 工正 吉田又四郎 室宜  
 南田八五郎 吉養

高さ一の丸は、中上層で分ぬ、前物の圍は十分一に甚いた形で、僅かに下が狭くなっている。  
 墨書とされている文字は古の通りで、これによつて見ると萬延元年（一八六〇年）毛利宗成高泰公とき、今より百十年前に建築であることがわかる。鶴居路史にある「佐伯下三の丸の金屋成る、番頭關成美並段す」がこれである。但し鶴居路史は三月二十日の落成によつてゐる。